



説教要旨 「ただ事でない愛」

ルカによる福音書 15 章 11～24 節

ある人に二人の息子がいて、弟の方が父親に、「わたしが頂くことになっている財産の分け前をください」と言いました。それは子が親に絶縁状をたたきつけるようなことですが、この父は息子の身勝手な望み通りに財産を分けてやりました。遠い国に旅立った息子はそこで放蕩の限りを尽くして、財産を使い果たしてしまいました。食べるにも困りはじめた彼は、ユダヤ教で汚れた動物とされている豚の世話をするようになります。飢えと孤独の苦しみの中で、この息子は我に返りました。自分が父にどれだけ愛されていたのか。その父の愛に対して自分がしでかした罪の大きさにづいた彼は、父の所に帰ろう、と決意します。そのままではのたれ死ぬしかないのですから、恥も外聞もありません。戻ったところで「おまえなど知らない」と冷たくあしらわれ、そこでのたれ死ぬしかないかもしれませんが、一縷の望みをかけて「雇い人の一人にしてください」（19 節）と願い出ようと家路につくのです。

この息子がボロボロになって帰って来るのを、父はまだ遠く離れていたのに見つけ、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻して迎えました。息子の謝罪の言葉を聞くまでもなく、です。絶縁状をたたきつけて自ら出ていったこの息子を、一言の小言を言うこともなく赦し、愛する息子として迎え入れる、それがこの父親の姿です。それはもはやわたしたちの常識では考えられない、あり得ない姿です。この親はどこまで甘いんだ、と笑いものにされるような姿です。しかし、イエス様が示してくださる神様は、このような愛をもって私たちが愛してくださっているお方であり、この神様の愛を信じることにこそ、私たちの救いがあるのです。

もはや救われようの無い罪を犯し、いまさらどの面下げて戻ればいいのか分からない。戻ったところで「おまえのことなど知らない」と見捨てられても仕方のないわたしたちです。そんな私たちが生きる道は、この私たちの常識を越えた神様の愛に信頼することしかないのです。



(2019・11・10 説教者：稲垣真実)